

二〇二三年度

恵泉女学園中学校 第一回 入学試験問題

国語（四五分）（全二五ページ）

注意 一、開始のチャイムと同時に、問題用紙と解答用紙にそれぞれ受験番号と氏名を記入しなさい。

二、答えはすべて解答用紙に書きなさい。

三、字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。

受験番号
氏名

一、美雨は中学二年生の女の子です。母親が家を出て行ってしまい、今は父親と二人で暮らしています。父親は元料理人でしたが、今は会社勤めで忙しく働いています。今日は美雨の誕生日でしたが、友人に祝ってもらえませんでした。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

重い気持ちをひきずって、家まで帰ると、お父さんが帰っていた。

「ただいま……」

あいかわらず、かつおだしの匂いがする。

そして、あいかわらず、お父さんは、わたしに、⁽¹⁾ぶあつい背中の壁を見せて、「お帰り」とつぶやいている。

このひとはきつと、わたしの誕生日なんて知らない。

かつおだしで、いったい、なにをつくっているんだろう？

今日みたいな日は、わたしの好きなものだったら、それだけでもいいな、とちょっと気になって、台所をのぞきに行った。

「美雨、ちょっとおそくなったから、おまえも手伝うか？」

「え？ いい」

お父さんは手を止めて、わたしを見た。

「なに？」

「いや……」

毎日、毎日、同じやりとり。うんざり。

「お父さん、会社は？ また早退？」

「いや……フレックスで」

「？」

「早く行って、今日のぶんの仕事をすませた」

「だから、フレックスって？」

今度は、 顔をした。

「フレックス、知らないのか？」

お父さんと、目が合う。

お父さんの目からは、なんの気持ちも感じられない。お母さんの目はいつも、わたしのことを、かわいいって、言ってくれていたのに。

「知らないけど」

しばらくの、間。そして、

「フレックスというのは、会社には、定時、というものがあるんだけど、ある程度自由に、始業時間と、終業時間を自分で調整できる制度だよ。夜、早く帰りたければ、朝早く行って、先に仕事を始めればいい、ということだ」

「ふうん」

「だから……」

そのあとの言葉がない。

お父さんはいつも必要最小限のことしか、しゃべらない。

それじゃあ、どこでなにをして、なに考えてるのか、全然わからない。

そして、唐突に、言った。

「美雨は……なんだかいつも、機嫌きげんがわるいなあ……」

いきなり、(2)金縛りかなしばりにあつたような衝撃しやうげきをうけて、しばらく動けなかった。

いつもって、いつのいつもなの？

お母さんがいなくなってから？

だとしたら、ひどすぎる。だって、機嫌よくすごしているほうがどうかしてる。大体どうしてそんなことを、このひとに言われな

いといけないの？

「ほら、おまえも手伝いなさい。これ、使って」

赤いリボンのかかった、白い、殺風景な包みが、ふたつ。

「今日、誕生日だろ？」

その言葉はまるで、はずかしいもののように、わたしの中でこだました。考えないようにしていた言葉。どういふうな位置にあつて、どういふうに処理するのか。いちばんこまる言葉。

それが、いちばん思いもかけなかったひとの口から、でてきた。

だから……これって、この流れだと、誕生日プレゼント、なの？

でも、これ使って手伝って、どういふこと？

いまの衝撃から立ちなおれないまま、真っ白な包みをやぶく。手がふるえる。

やっと、ひとつの箱をあけた。

また包み紙がはいっていたのかと思うほど真っ白な、布。

ひろげてみると、長いひもがついた、カフェエプロンのようなものだった。

自分で、つけてみるまえに、

「ほれ、こうやってつける」

と、お父さんがみずからやってみせてくれた。カフェエプロンというより……。

「これ、板前さんの前かけ？」

やっと声のでた。すると、お父さんは、てれたような顔をした。

なんででれるの？

これが前かけだと、この細長くてうすい包みは、あけるまえから、なんとなく予想がついた。

ブツをとりだして、お父さんをにらみつけた。

そうしたら、うれしそうな顔のお父さんがそこにいて、わたしの手から包丁をするりとぬきとった。

「いいだろう？ この包丁！ お父さんが愛用している包丁と同じ職人さんの手で作ったもので、おとな用より、すこし小ぶりなんだ。ほらここに」

包丁の柄えの部分に漢字で「美雨」とはいつている。

「誕生日プレゼントだと言ったら、彫ほってくれた」

そう言って、包丁を返してくれる。わたしは、⁽³⁾力がぬけそうになって、あやうく包丁を落とすところだった。

ハムスターとイヤホン。

お母さんがいたら、それをもらっている予定だった。

もふもふのハムスターにすりすりしながら、音楽をきいてごきげんな誕生日をむかえているはずだった。

「さ、やるぞ」

お父さんはひとしきりひとりでもりあがって、自分の気がすんだのか、また、料理にもどろろとしていた。

「やるぞ?」

「美雨も手伝え。今日はおまえの好きなオムライスをつくるから」

今日は、いったいなんていう日なんだろう。

わたしは手にしていた前かけをお父さんにつきかえした。

「美雨?」

「お父さんは知らなかったの? わたしがオムライス、食べられないってこと」

自分でも思っていないほど、冷たい声だった。

「誕生日にオムライスがいちばんダメだって、知らないの?」

お父さんのびっくりした顔。やめてよ、その顔。どうしていつも。

「オムライスを食べると、はきそうになるんだけど」

わたしは静かに、包丁を作業台の上に置いた。

「なに言ってるんだ。おまえ、オムライス、好きだっただろう！」

(4) その言葉はよけい、わたしを悲しくさせた。

「もう今日はつかれちゃったから、寝るね」

わたしは、冷えてしまった指先を胸のまえでこすりあわせた。

「美雨！」

お父さんの声を階下にききながら、長かった一日を早く終わらせたくて、制服のまま、ベッドにもぐりこんだ。

翌日、朝起きたら、お父さんはもういなかった。

きっと、フレックとか、なんとかというやつだ。

テーブルの上に、ロールパンのサンドイッチふたつとお弁当と水筒すいとうがのっていたので、パンを口に運ぶ。

きのうのお昼からなにも食べてないのに、まるで、おなかがうけつけてくれない。

なんとかひとつだけ、もそもそ食べて、残りを冷蔵庫にしまう。

玄関げんかんをでると、また、雨。

わたしが泣くと、雨がふる。わたしだけのジンクス。

今年はきつと、ダムや貯水タンクが満タンになるんじゃないかな。

学校でも、泣きすぎた目がなんだかはれぼったくて、ゴロゴロして、お昼まで、ずっとぼーっとしていた。

(中略)

ランチクロスをほどいて、またまたいやな予感がする。今日もお弁当箱がちがう。

しかも、水筒かと思つたこれは、スープポットだったのか。

お弁当のふたをおそるおそる、あけた瞬間、

「わあ、美雨ちゃんったら、オムライス！」

と、桃花の第一声が教室にひびく。

桃花の声の大きさより、まさかのオムライスがはいつてること、信じられないものを見てしまった気持ちわるさがこみあげてきた。

「美雨のお母さん、最近、ホント、めっちゃ腕あげてさあ、なに食べてもおいしいよね」

お母さんはいま、料理教室にかよっていることにしてある。

桃花は、ハシをこちらにむけて、もう食べる気まんまん。

「だけど、なにこれ、刺身^{さしみ}? お弁当に? ありえない」

その言葉によけいのがつまる。返事したら、目からべつのものがあふれそうで、声もだせない。

きのう、ケンカしたから? だからなの?

小さく折りたたんだ、メモ。開くと、

『今度こそ、お誕生日おめでとう。お父さんより』

と走り書き。⁽⁵⁾ 力のかぎり、ぐしゃぐしゃにまるめて、カバンにほうりこんだ。

「食べて、いいよ……」

やっこのことで、そうつぶやくと、桃花が、

「では、いっただきまーす」

と、無造作に、卵にハシをいれた。

「ん。ん? あれ?」

口の動きが止まった。

「美雨ちゃん、これさあ、オムライスじゃないよ」

え?

里美ものぞきこんで言う。

「それにほら、これ、ローストビーフでしょ？ お刺身のわけ、ないじゃない」

そう言って、おかしそうに笑う。

「美雨ちゃんも食べてみて。ほら、これ、なんちゃってオムライスだから」

なんちゃってオムライスにローストビーフ？

「ローストビーフ一枚いただき！」

とたんに、桃花が玲央きに怒られてる。

「一枚とったら、残り一枚になっちゃうでしょ！ そういうことしない」

桃花は、不満そうに、ローストビーフを小さく切って、勝手にたれビンのたれをかける。

「おいっしい！ めっちゃウマ！ びっくり」

その言葉に、ダメと言ったばかりの玲央も、みずからその残りを四等分にして、千佳、里美、愛海にくばって、自分も食べた。

「ホントに！ ほら、美雨も食べて」

お刺身のように、ピカピカで、うすい赤色のローストビーフは、ハシでかんたんに切れる。

クレソンがそえてある。芸が細かい。クレソンもちぎる。

たれをかけると、わさびの香りがひろがって、口にいれたら、ほろほろっと、とけてなくなった。

「ほんとだ……」

「こんなローストビーフ、食べたことないかも」

と、愛海におっとり言われて、オムライスをよく見た。桃花がけずった部分から、中のライスが見えている。たしかに、ケチャップライスの色じゃない。

わたしは、スプーンでひとくちすくいあげた。この色合い、わたしは知っている気がする。

『今度こそ、お誕生日おめでとう』

⁽⁶⁾ お父さんの言葉と、オムライスの味が口の中で、まざりあった。

梅干しのすっぱさに、まず、口がクシュツとなると、つぎにきたのは、バターとしらすぼしをいためたときの、あまい匂い。

小梅のカリカリツとした食感。ベーコンとにんにくの隠^{かく}し味。

その一見バラバラのものをまとめているのが、あまじょっぱい、しょうゆ味のうす焼き卵だ。

これ、知ってる。食べたことがある。わたしの……大好きな味だ！

とたんに、なつかしい思いがあふれてくる。

小さいころ、わたしはオムライスが大好きで、すこし熱があるのに、オムライスが食べたいって、わがままを言った。たしか誕生

日だった。

お父さんは仕事がいそがしくて、ちっとも帰ってこなくて、お母さんとファミレスに行ったんだ。

で、オムライスののった、お子様プレートを目のまえにして、いさんで食べたなら、せきこんで、はいてしまった。

お母さんがもう、ほんとうに小さくなって、お店のひとや、まわりのひとにあやまっついて、なにも食べないで、でてきてしまったのをよく覚えている。

それ以来、オムライスを見ると、気持ちが変わるくなって、食べられなくなっていた。

小学校一年の誕生日に、どうしてもオムライスが食べたくなって、泣いてたら、このオムライスがでてきた。

見かけはオムライスなのに、全然オムライスじゃないもの。

お父さんがつくってくれた、ハッピーバースデーのオムライス。

(しめのゆき『美雨13歳のしあわせレシピ』)

問一 ⁽¹⁾ぶあつい背中(せなか)の壁(かべ)とは、どのようなことをたとえていますか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選

び、記号で答えなさい。

ア 私が父と分かり合いたいと思っていないこと。

イ 父が頼りがいのある大きな存在だということ。

ウ 父が私を拒絶しているように感じられること。

エ 妻のいなくなった喪失感を父が隠していること。

問二 Aには父親の表情を表す語が入ります。あてはまる語として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で

答えなさい。

ア 照れくさそうな

イ めんどくさそうな

ウ 陰気くさそうな

エ うさんくさそうな

問三 金縛りにあったような衝撃をうけて、しばらく動けなかった とありますが、このときの美雨の気持ちの説明としてふさわし

いものには「A」を、ふさわしくないものには「B」を書きなさい。

ア 母がいなくなってしまう、機嫌よく過ごせない自分の気持ちに父親が気がついてくれたことに感動している。

イ 娘には関心がないと思っていた父親から、突然自分の態度について話題にされたことに驚きを感じている。

ウ 母親がいなくなればつらくなるのは当然なのに、それを強くとがめる父親の理不尽さに不満を感じている。

エ 母親が家にいた頃の様子を抜きにして、それ以降の様子だけで自分を判断されているように感じ、怒りを覚えている。

問四 力がぬけそうになって とありますが、このときの美雨の気持ちの説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、

記号で答えなさい。

ア 前からお願いしていたハムスターとイヤホンをもらえると思っていたのに、希望を無視されてぼう然としている。

イ 父親が自分のことを思っ買ってくれたプレゼントなのに、それを喜ぶことができな自分に対してもどかしさを感じている。

ウ 父親が自分の気持ちに寄り添ってくれるようになったと喜んだのに、実際は父親の自己満足に過ぎなかったと気づき、失望している。

エ 自分の不満そうな様子にも気づかず、よい贈り物おくをしたとうれしそうにしている父親の様子に不満を訴えるうった気力をなくしている。

問五 その言葉はよけい、わたしを悲しくさせた とありますが、どういうことですか。説明しなさい。⁽⁴⁾

問六 力のかぎり、ぐしゃぐしゃにまるめて とありますが、なぜ美雨はこのように行動したのですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。⁽⁵⁾

ア 父親がお弁当を作っていることを友人に気づかれたら困るから。

イ お誕生日おめでとうと書きつつ嫌がらせいやをしてきたと思ったから。

ウ 誕生日だったことを友人に知られたら気まずくなるから。

エ 変なお弁当に落ち込んでいない自分を友人に示したいから。

問七 お父さんの言葉と、オムライスの味が口の中で、まざりあった とありますが、どういうことですか。説明しなさい。⁽⁶⁾

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文には、一部改めたところがあります。)

ここでひとつの仮説ですが、こうして環境問題に対して具体的な行動を起こすことが難しいのは、環境よりも経済性を優先する仕組みになっているということと共に、⁽¹⁾「環境」という言葉が前提とする人間と自然の関係性に原因があるのではないのでしょうか。

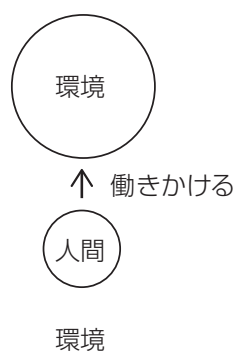


図 環境と人間の関係性

環境問題について話しているとき、私たちは環境が観察でき、分析できて、より好ましい状態に変化させていくために、外部から働きかけることができるものとして扱っています。こうした前提において、環境に働きかける私(＝人間)は、対象である環境の外側にいるものとして扱われます。この様子を画にすると、ちょうど図の「環境と人間の関係性」の右側のイメージです。

対象である環境に外部化されたところに立っていると、まるで気候変動という流行り病にかかってしまった「環境」という患者さんに対し、処方箋を出す医師のように、私(＝人間)は第三者的に環境と向き合うことになります。こうしたものの見方は、状況を俯瞰して適切な対処を考えると、ということにおいては有効ですが、こと環境については、人間も環境のなかにいる存在ですから、このとらえ方は実際の状況とのズレがあります。

(注) 俯瞰…高いところから広く見渡すこと。

さらに留意すべきことは、

A

病には治療法があるだろうと信じているのです。こうして徐々に、専門知識が必要な事柄については専門家に一任するようになり、やがて状況に対して自分で考えることを止めてしまいます。環境問題に関しても、専門家が処方してくれた技術や制度に従うことによって、地球生態系の許容範囲内で暮らしていける仕組みが社会に導入されるようになる日を安静にしながら待つ、ということが賢い選択のように思えてきます。

このように環境問題について人間と環境を切り分け、高度な分業化でそれぞれの分野の専門家に任せることで解決策を模索しているのが、今日の環境問題の構造のようです。また、本書で何度も出てきているSDGsについても同じ構造が生まれつつあるのではないのでしょうか。例えば、二〇三〇年までの全人類の開発目標として一七目標が示されているわけですが、これを全て言える人はどのくらいいるでしょうか。ましてその背後に一六九のターゲットがあると聞けば、もうこれは専門家に任せるのが最良の策のように思えてきます。

このように、対象を外部に切り出して、それぞれの分野の専門家に対応策を提案してもらおうという構造がつくられていくことで起

きるのは、「主語の留守状態」であり、やがて「環境」には「私」がない」という状態になります。「環境—人間」というように、主体と客体を切り分けて物事をとらえることは、近代科学の基礎的な作法です。私たちはこの作法にすっかり慣れてしまっており、これによって導き出されることを客観的な事実とし、主観的な意見を凌駕するものとして扱ってきました。しかし、環境問題における人間は、環境それ自体の内側に居ますから、客観的な事実を導きだす当人の主観的な意見もはじめからそこに含まれることとなります。輪の外側をなぞっていたら実は輪の一部が捻れてつながっていて、いつの間にか輪の内側をなぞることになるメビウスの輪のような感覚かもしれません。こうした視点の捻れをどのように解消したらよいのでしょうか。私は、そのヒントが「風土」という概念にあると考えています。

環境 (Environment) の語源には「周辺」という意味がありますが、日本語には環境の他にも人間と自然の関係をとらえるときに用いられる表現があります。それは「風土」です。風土の定義に関する議論は色々ありますが、本書では以下のように考えたいと思います。

風土は、自然と人間のあいだにあるひとまとまりの関係のこと。「風」は文化・民俗を、「土」は土地・地域を表し、これらは互いに独立してあるのではなく、ひとつのまとまりとして **B** に存在する。風土の視点において自然と人間は、自然が人間をつくり、また同時に自然は人間につくられる、という相互に定義し合う関係にある。こうした相互に定義し合う関係性を「逆限定の関係」と

(注) 凌駕…ほかのものをしのいで上に出ること。

表現したいと思います。こうした自然と人間の関係性を絵にしたものが、図の左側のイメージです。

その上で、風土は「私たち」という主語で用いられるという特徴とくちょうがあると考えています。なぜならあるひとつの風土は、その風土が形成される地域に暮らす・関わりのある人々の間で共有され、語られるものだからです。風土は個人が認知にんちできますが、個人が単独で形成することはできません。風土は常にある地域に暮らす・関わりのある人たち（＝私たち）を主語として語られます。例えば、「この町では」、「この地域では」、「うちらは」というような表現がこれにあたります。

このように、風土は「私たち」という主語ともなを伴って、人間と自然とのあいだのひとつとままりの関係性を表しています。このことは同時に、個々の土地ごとに異なる風土があることを意味します。つまり、地域Aに暮らす私たちにとっての風土と、地域Bに暮らすあなたたち（地域Aのそれとは別の私たち）にとっての風土は異なるということです。

異なる風土を語るいくつもの「私たち」があることを認めることで、多元的な世界観を受け入れることができます。「環境—人間」というような、二項にこう対立的な世界観における客観的対象としての「環境」では、全地球・全種的に共有しているひとつの環境があるということが前提になっていますが、複数の異なる「私たち」をはじめから内化している風土は、⁽²⁾多元的な世界を前提にしているのです。

風土では自然と人間が B なひとまとまりの関係としてありますから、この風土の視点においてサステイナビリティを考え行動する（＝「何をまもり、つくり、つなげていきたいのか」を考え行動する）ことが、ひいては自然をつくることになり、そうして

また、つくった自然に人間がつくられる関係へ展開していくことと同義になります。このことを従来の「環境のサステイナビリティ」⁽³⁾に対し、「風土のサステイナビリティ」と呼びたいと思います。

気候変動や地球温暖化に代表されるこれまでの環境問題の議論では、その影響範囲が全地球であることから、環境のサステイナビリティが重要視されてきました。この視点をを用いることで、地球環境の状態を俯瞰的に把握することはできるようになりました。しかし、実際に課題に向き合う段階において、行動主体となる主語は見失われてきました。

環境のサステイナビリティの視点によって観察・分析・介入を検討した情報は、状況に対する対処療法的な視点を与えてくれます。このような視点を片方に持ちながら、「私たち」という主語を用いてより実際の体験としての自然と人間の関係性についての情報を与えてくれる、風土のサステイナビリティの視点を補うと、今度は思考を展開している私を環境のなかに内化した視点から、日々をどのように暮らしていけばよいのかを考えることができるようになるのではないのでしょうか。

一方で、風土の視点にも限界があります。それは、その範疇を「地球」や「グローバル」というマクロ視点にまで引き上げると、風土の視点からサステイナビリティを語るときの「私たち」という主語に対する意識がとても弱くなってしまう、あるいは消えてしまうことです。全地球的な風土というものが仮に想像できたとしても、その規模において風土の特徴である「自然が人間をつくり、自然は人間につくられる」という相互に定義し合う関係が、規模が大きすぎて私たちには認知することがとても難しくなります。少なくとも私自身は「地球の風土」というような表現に手触り感を感じられないのですが、このあたりについてそうした認識も可能だ

(注) 対処療法…目の前の状況に応じた処理や処置。

範疇…おおう範囲のこと。

とする議論もあります。

気候変動や地球温暖化のようなグローバルな環境問題や、SDGsのような全人類の開発目標という枠組みわくぐみにおいては、自然と人間が互いに定義し合うこと（逆限定の関係）が認知できないがゆえに、どこか他人事のような感覚が生じるように思います。他方で、ある地域や町といった程度の規模であれば、明日からの私の行動の変化がどのように自然と人間のつくり・つくられる関係のなかでの変化として現れるかを容易に想像することができるでしょう。「私たち」という感覚が成り立つ風土という視点を充足じゅうぞくしていくことで、環境問題に対しても主体性を持つことができるようになるのではないのでしょうか。

（工藤尚悟『私たちのサステイナビリティ—まもり、つくり、次世代につなげる』）

問一 (1) 「環境」という言葉が前提とする人間と自然の関係性 とありますが、ここでの人間と自然の関係はどのようなものですか。

解答欄に合うように一五字以内で説明しなさい。

問二

A

には次のア～エの文が入ります。正しい順序に並べ替えなさい。

ア その間、自分も流行り病にかからないように、手洗いやうがいなどの予防策に努めます。

イ なぜなら、万が一に病にかかってしまっても医師が治してくれるだろうと高を括くくっているからです。

ウ 全ての人が医師になれるわけではないので、世の中の大多数の人々は処置を見守るといせんたくう選択をします。

エ 予防策に努めるのですが、意外と徹底てっぺいするわけでもなかったりします。

問三

B

に共通してあてはまる語として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 不可能 イ 不可解 ウ 不可欠 エ 不可分

問四 多元的な世界⁽²⁾ の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間は全地球的なひとつの環境だけでなく、山をふくむ地域、海を含む地域といった風土という世界も持ち合わせているのだということ。

イ 風土とはその町に関わりのある人たちが作りだすものであり、そのような風土を私たちは人生を通して複数持って世界を構築していくということ。

ウ 人間と自然とをひとまとまりとする風土は、個々の土地によって異なり、そのようないくつもの風土が重なり合って世界が存在しているということ。

エ 異なる風土に住む人たちが語り合うことで、次第にそれぞれの特徴が混ざり合ったひとまとまりの世界が生み出されていくということ。

問五 「風土のサステイナビリティ」⁽³⁾ とありますが、環境問題を考える上でこの視点をもつことの利点と問題点を筆者はどのように考えていますか。それぞれ四五字程度で説明しなさい。

問六 筆者の考え方として最も適切なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア SDGsのような全人類の取り組むべき問題こそ、自分の属している風土の中で考えるとよい。
- イ 「地球の風土」という認識をしている人は、「私たち」という主語の意識が強い人である。
- ウ 大きな規模でも小さな規模でも自然と人間はつくり・つくられる関係であると認知できる。
- エ 環境問題については、全地球的な風土というマクロ視点から考える必要がある。

三、次の①～⑤の文のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 同じような事件はマイキヨにいとまがない。
- ② ゲンカクな父のもとで育つ。
- ③ 米不足のときはザツコクを食べていた。
- ④ ハンコツ精神で努力し続ける。
- ⑤ けんかをチュウサイする。